

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32685

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500909

研究課題名(和文) 3歳未満児保育における心理的拠点としての保育環境と生活主体形成に関する研究

研究課題名(英文) Early Childhood Environment as the Psychological Base under Three years old and the Development of a Healthy Self-identity

研究代表者

齋藤 政子 (SAITO, MASAKO)

明星大学・教育学部・教授

研究者番号：90279810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、科研費助成研究(課題番号201500714)の成果を踏まえ、3歳未満児を対象とした集団保育の場のひとつである乳児院を対象に質問紙法による調査を行い、3歳未満児のための保育室環境のあり方を検討した。全国1459名から回答を得た意識調査の結果、「ひと」項目のほうが「もの」「空間」よりも平均値が有意に高い。因子分析の結果、「主体的な遊びと生活」「応答性」「十分なケア」「発達」「安全性」に関する因子が抽出された。「主体性」や「遊びの動と静」への配慮に関する項目の割合は保育所保育者の方が高いのに比べ、「移行対象」や「安全衛生」に関する項目は乳児院保育者の方が高いことなどがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to submit suggestions about the significance of the nursery room environment in infant homes as one of the places by group nursing for children under three years old based JSPS research about day-care centers (201500714). 1459 nursery teachers were asked through a questionnaire-style survey nationwide. The results were as follows (1) there was a significant difference between 'person' items 'object/space' items (2) the following five factors were identified from a factor analysis; 'independent play and life', 'responsive communication', 'sufficient care', 'development' and 'safety' (3) There was a large proportion of items about "independent play and life" and "a space for movement and quiet" of nursery teachers at day-care centers more than nursery teachers at infant homes. And there was a large proportion of items about "transitional object" and "safety" of nursery teachers at infant homes more than nursery teachers at day-care centers.

研究分野：生活科学

キーワード：3歳未満児保育 心理的拠点形成 「もの」「空間」 乳児院 保育環境 保育室 主体性 乳児保育

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 欧米では、保育の質を高めることが、社会全体の課題であると認識されつつあり、OECDでも、3歳未満児保育の質の問題やプログラムの評価などが議論されている(『Starting Strong ECEC, Education and Skills』と『Starting Strong ECEC』)。OMEP(世界幼児教育機構)Sweden大会で現地実行委員長を務めたIngrid Engdahlは、乳幼児を取り巻く環境の問題について言及し、子どもの主体性を高める保育の重要性について強調している(International Journal of Early Childhood Vol.42 No.1 May 2010)。

国内でも、保育の環境がどうあるべきかという問いに対しては、全国社会福祉協議会が、欧米と比較した日本の実態調査を踏まえ、現行の面構基準を見直す必要があることを指摘しており、埋橋玲子(2004)も、Harms,T他の「保育環境評価スケール」を紹介しながら、客観的で役立つ基準を環境についても持つ必要があることを強調している。

しかしながら、3歳未満児の保育環境として、保育者という「人」が果たす大きな役割のほか「物」と「場所(空間)」の果たす役割があり、それらがどのように機能しているかという研究は、ほとんど見当たらない。

(2) 本研究で提示する「心理的拠点形成」は、応募者が、修士論文で定義した「乳幼児の見通し能力」を育てる基礎を成すものとして、すでに使用していた概念であるが、その後、金田・諏訪が他の研究(『母子関係と集団保育』1991)を除いて、保育環境との関連ではほとんど使用されていない。しかし乳幼児における「見通し能力」と「心理的拠点形成」は、心理学・教育学からの知見を整理し提示するものであり、乳幼児の主体形成を進めるうえで、監縮的根拠を与えるものであると考えられる。また、保育園の室内環境における空間構成については、近年、「一人ひとりの発達を保障する場づくり」や、「快適な生活空間づくり」をめざして保育実践が進められている(塩美佐枝他、2001)が、「生活の主体形成」や「遊びの主体形成」という観点から、保育環境と心理的拠点について分析したものはない。したがって、1,2歳児の安心感を保障し、主体形成を促す保育環境のあり方を提言することは保育の質向上に向けて意義があるといえる。

## 2. 研究の目的

筆者が2009-2011年度に行った科研費助成研究「乳幼児の心理的拠点形成と保育環境に関する研究」(課題番号21500714)基盤研究(C)では、乳幼児にとって、保育者という人的環境のみならず、「もの」「空間」という物的空間的環境が、乳幼児の心理的拠点として機能し、遊びや生活全体に何らかの影響を与えることが明らかとなった。特に新入園児のように大きく環境を変化させる乳幼児にとって、「みため・つもりあそび」を引き

出すおもちゃなど表象活動を豊かにする「もの」や、絵本コーナーやソファなどのくつろぎの場が慣れ過程に効果をもたらすことも明らかとなった。

しかしながら、前述のように、3歳未満児保育における心理的拠点としての保育環境が、子どもにどのような意味をもつのかについて実証的に調査するものは少ない。そこで、本研究では、3歳未満児の保育環境において、「ひと」と「もの」と「場所(空間)」は、心理的拠点としてどのように機能し、3歳未満児の生活主体形成をどのように促すのか、「人と関わる力」はどのように育つのかを明らかにすること、新しい場に慣れていくプロセスにおける環境の役割、および、3歳未満児(特に1,2歳児)の生活活動・あそび活動を支える保育環境の役割について考察し、日本の3歳未満児の保育環境「人」、「物」、「場所(空間)」のあり方や改善の方向性を明らかにすることを目的とした。さらに当面の課題として、第一に全国の保育所保育者を対象とした意識調査の結果について多変量解析を行い、経験年数・年代との関連で考察を加えること(研究1)、そして首都圏におけるK市の全市調査結果を分析すること(研究3)、第二に全国の乳幼児保育者を対象とした3歳未満児の保育環境に関する意識調査を実施し(研究2)保育所調査との比較を行うこと(研究4)、第三に、乳幼児における保育者へのインタビュー調査を行うこと(研究5)とした。

## 3. 研究の方法

### 研究1, 3の調査方法

子育てネット全国保育所一覧(2009)<sup>28)</sup>をダウンロードし、二段層化抽出法により保育所(以下、保育園と表記する)を選び郵送によって質問票を配布した。神奈川県K市は、企業等が運営する認可外保育園を含む全市調査をおこなったため、K市社会福祉協議会及びK市保育協議会に協力を要請しその旨を記載した調査依頼状と共に市内全園に送付した。そのため東京都294園、神奈川県362園(うち162園はK市)、埼玉県180園、千葉県147園、上記以外の全国224園、全体で1207園の保育園に郵送、32都道府県、公私立合わせて293園(公立53園、私立100園、不明140園)から回収があった。園の回収率は24.3%。有効回答数は、回答の返送が4部以上だった園もあったため1338となった。

調査内容：3歳未満児の生活と遊びを支える保育環境に関する調査用紙は、岩立他(1997)の「保育者の評価に基づく保育の質尺度」やT.Harms他著;埋橋玲子訳(2004)の「保育環境評価スケール乳児版、全国社会福祉協議会(2009)の「機能別にみる環境・空間の設え：ガイドライン」などを参考に項目を作成した。質問項目は、保育の最低基準ではなく、保育者自身が必要と感じて実施し始めているものや、T.Harms他のスケールのように日本以外の国の文化を素地に作成されているものもあ

ったが、すでに尺度として何らかの形で使用されている項目を中心に設定した。作成の観点として、おもちゃや絵本など保育環境内の「もの」に関する項目やコーナーや活動の場所などの「空間」に関する項目を44項目設定した。この項目について、実態として行っているという度合い(実施度)と、理想としてほりたいという度合い(重要度)を5段階評定で選択する調査を行い、分析した。

#### 研究2の調査方法

全国乳児保育協議会に協力を依頼し全乳児院131か所に施設長宛依頼状とともに調査票を郵送した。回答があった乳児院は103施設(回収率79%)1459人である。調査内容は、研究1に則り「3歳未満児の生活と遊びを支える保育環境」に関する項目を乳児院の現状に合わせて54項目作成した。実態として行っているという度合い、理想としてほりたいという度合い(重要度)を5段階評定で選択する調査である。統計処理は、SPSS Statistics 20で行った。倫理的配慮については、質問票郵送の際に情報提供者となる園長及び保育者の同意・了解を書面によって得るなど、必要な配慮を行った。調査時期は2013年秋。なお、育児観と保育環境観との関連についての分析は今後行う。

#### 研究5の調査方法

神奈川県内のある乳児院保育者(直接処遇職員)18名を対象にインタビュー調査を行った。研究の目的や内容、個人情報保護等について説明し同意を得た(明星大学研究倫理審査委員会承認番号H25-002)。保育環境に対する理解や考え方の変化、実際に行っている取り組みや子どもの様子について、半構造化面接を行った。しかし、現時点では結果の分析が終わっていないため報告は今後行う。

## 4. 研究成果

### 研究1

(1) 実態(実施度)についての「もの」「空間」44項目について因子分析を行った(重み付けのない最小二乗法、プロマックス回転)。リスト毎の欠損値を除外してN=970で計算し、固有値の大きさの変化をスクリープロット、因子の単純構造、因子の解釈可能性の観点から四つの因子を抽出した。

因子1は、因子負荷量の高い項目として「保育者がクラスの子ども又は担当の子どものお気に入り遊びやおもちゃを把握している」「おもちゃの取り扱いなどのトラブルにはお互いの主張を聞き合い認め合えるよう援助している」という、保育者がどのようなおもちゃを使った遊びに配慮をしているかに関する項目が並ぶが、「子どもが安全に遊ぶよう配慮する」「口に入れるおもちゃは毎日洗うか拭いている」など、安全・清潔に配慮する項目もある。たとえば、「制止や禁止の指示を極力少なくするために、部屋の中に子どもが登りたくするよ

うな机や台を置かないようにしている」という項目は、使わない台があれば1,2歳児は必ずそれに登ろうとするであろうし、安全性の面から登ろうとする子どもを制止する必要性が出てくるだろう。したがって制止や禁止の言葉を保育者が発する回数が増える可能性があるという見通しを項目からイメージできるものだが、そうした面からみれば、個々の子どもの遊びを把握する項目と同様、「室内全体を広く見渡す」ことができるかどうかという側面も内包されている項目であるといえる。また一方で、「子どもの行為について言葉で代弁」したり、「発達段階や年齢指導計画に配慮して配置するおもちゃを変える」「部屋の中のおとなの重線が子どもの遊びを妨げないように配慮する」という様々な角度から環境を見ると保育者自身の視野の広さを感じる項目も多い。そこで、この因子は、子どもの発達や活動、おもちゃの適時性など視野を広くもって環境を整えていると捉える因子と考え、「**保育者の視野の広さが反映された環境**」と命名した。

因子2は、「ハイハイしたり歩き回ることでできる動的なスペース」「清潔な家具」「自然光や換気の調節のできる設備」「持ち物の個別収納」「日常のケアのための家具」「子どもとおとながくつろぐための家具」「歩き始めの子どものサイズに合わせたテーブル」といすなど、日常生活活動のための設備や家具に関する項目が多いため、「**日常のケアのための十分な環境**」とした。

因子3は、「ままごとコーナーに人形が一体ずつ配置されている」ことや、「個人用おもちゃの用意」「いつでも触ってくつろげる場所」など安心感のある環境についての項目や、動的な遊びと静的な遊びはコーナーを離して配置すること、逆に同じような遊びのコーナーを隣り同士で配置するなど、コーナーについての配慮がうかがえた。また、「おとなと子どもが快適に接するための家具」の用意や「いろいろな経験をするのにふさわしい空間の用意」など、3歳未満児が快適に過ごすことのできる環境を作っているという意識が潜在的にあると考えられた。そこでこれらを総合して「**安心感のある快適な環境**」と命名した。

因子4は、「子ども自身が着替えを入れるための自分の棚やかご」「トイレの後に子どもが手を洗う流し台」「子どもサイズの便器」「子どもが自分で捨てられるゴミ箱」など、子ども自身が主体的に動いて生活するための環境整備についての項目が並び、子ども自身が主体的に行動するための環境整備を行っているという意識が反映されていると考えられたため、「**子どもの主体性が配慮された環境**」とした。

以上から、保育者は3歳未満児の保育環境について、快適で十分整った清潔な保育空間づくりを意識し、発達と活動の違いに応じてコーナーやおもちゃを用意しつつ、子どもたちの主体性についても配慮しており、そこには、保育者の意図が反映されていると捉えているので



ならではの発達の刺激のある環境の工夫が期待されているといえるだろう。また、子どもが人形に手を伸ばしやすくように配置されていることについては、重要だと思っている人の割合は7割に比べ、実際に行っている人は2割強にとどまり、保育所保育者への調査と同様、「子どもの主体性に配慮した環境」に関する理解が低い結果となった。一方、子どもの食事支援や睡眠時の見守りなどについては、乳児のSIDSや月齢の低さからも従来から必要性の認識が強く、重要度、実態とも、高い割合であてはまる回答が多かった。また、実態に関する54項目について因子分析を行った結果、「主体的な遊びと生活」「応答的で温かいコミュニケーション」「十分なケアと動と静のある空間」「室内外の安全性と設備の充実」「発達段階にあったおもちゃの充実」の五つの因子が抽出された。

表1 乳児院調査の回答者の属性

表5-7 乳児院調査 回答者の属性 (n=1459)			
		実数	割合(%)
性別	女性	1,385	94.93
	男性	69	4.73
	無回答	5	0.34
年代	①20歳未満	2	0.14
	②20代	510	34.96
	③30代	396	27.14
	④40代	282	19.33
	⑤50代	261	17.89
	無回答	8	0.55
	保育者歴	①5年未満	460
②5年以上10年未満		384	26.32
③10年以上15年未満		226	15.49
④15年以上20年未満		141	9.66
⑤20年以上25年未満		108	7.40
⑥25年以上		133	9.12
無回答		7	0.48
勤務形態	①常勤職員(担任)	1,307	89.58
	②非常勤職員(担任)	71	4.87
	③パートタイム	22	1.51
	④その他	40	2.74
	無回答	19	1.30
話をするや同僚と	かなりある(ほぼ毎日)	958	65.66
	少しはある(年に数回から毎月)	435	29.81
	ほとんどない(年に1、2度)	31	2.12
	全くない	4	0.27
	無回答	31	2.12

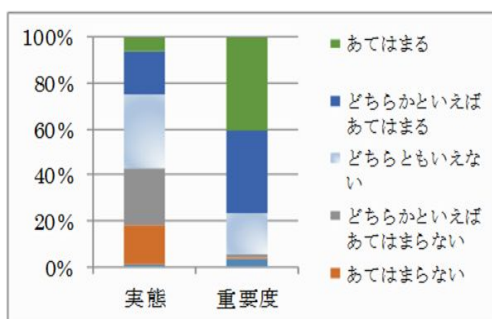


図2 着脱コーナー、おむつ替えコーナー、絵本コーナーの設置

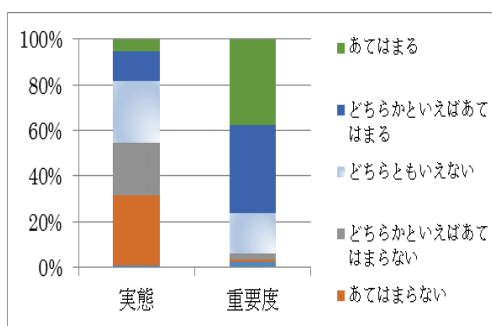


図3 指先を使って遊ぶコーナーの設置

### 研究3

神奈川県K市については全園への質問票送付を行っているため、研究1で行った実態項目44項目との運営主体との相関を調べた。地方自治体、社会福祉法人、財団法人、学校法人、株式会社、全体で、コレスポネンズ分析を行い距離を布置図にしたものが図4である。K市財団法人、学校法人、株式会社、及び神奈川県財団法人、学校法人、株式会社、NPO法人立の保育所に勤める保育者のデータが、大きくはずれた場所に位置しており、実態に対する意識の明らかな違いがみられることがわかった。また、株式会社立が回答者全体との間で0.1%水準で有意差がある項目は「養育室には、子どもたちのための動的なあそびをするスペースがある」「あかちゃん体操など個別にゆったりスキンシップをする時間と場所がある」であった。

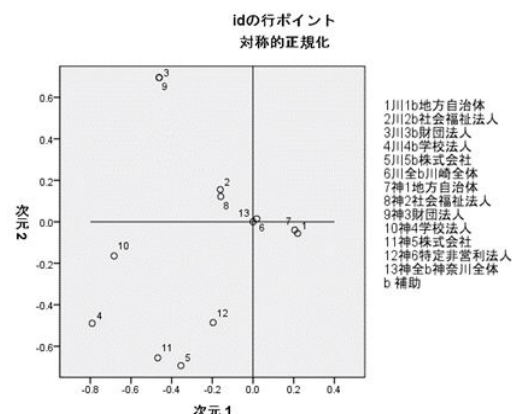


図4 K市およびK県の運営主体別分析布置図

### 研究4

2009 - 2011 年度の科研費助成研究(課題番号201500714)で行った保育所調査と本調査における乳児院調査に共通する項目32項目についてウイルクソンの符号付順位検定を行ったところ、各項目の実施度の二つのペアの変数の分布は同じであるという帰無仮説は棄却されすべての項目の分布が違うという結果となった。また、保育所と乳児院のデータに0.1%水準で有意差があった項目は、「柔らかいクッションや人形でくつろぐ場所」「自分で選んで絵本を読むコーナー」「いろ

いろいろな経験をする空間」「発達段階に配慮したおもちゃ」「授乳用のソファなど子どもがくつろぐための場所」「家庭からのおもちゃの受け入れ」「マイ人形など個人用おもちゃの用意」であった(表2)。児童福祉施設としての役割の違い、子どもの生活方法の違いなどによって保育者の意識が違ふことが推察される。

今後は、データの更なる分析、特に、運営主体や正規・非正規など属性との関連や児童福祉施設としての役割についても検討しつつ、3歳未満児の育ちを支える保育環境に対する保育者の意識の変容のプロセスを、インタビューデータから明らかにし、3歳未満児の保育環境のあり方について考察を深めていきたい。

表2 保育所調査と乳児院調査の比較

	質問項目	保育園		乳児院		有意差
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	柔らかいクッションや人形でくつろぐ場所	3.68	1.17	3.84	1.01	***
2	自分で選んで絵本を読むコーナー	4.16	1.17	2.74	1.49	***
3	いろいろな経験をする空間	3.68	1.00	2.84	1.12	***
4	発達段階に配慮したおもちゃ	3.96	0.97	3.49	1.08	***
5	部屋の自然光や換気の調節	4.33	1.00	4.28	0.95	
6	授乳用のソファなどおとなと子どもがくつろぐための場所	2.25	1.44	2.85	1.41	***
7	くつろげる場所と時間がある	3.82	1.04	4.37	0.94	*
8	手入れが行き届き清潔	4.11	0.90	4.29	0.95	
9	着脱コーナー絵本コーナーなど子どもにもわかりやすい	3.61	1.19	3.43	0.95	
10	動と静の遊びコーナー離して配置	3.62	1.27	2.97	0.95	**
11	人形はままごとコーナーに一体ずつ配置	3.40	1.48	3.29	0.95	
12	部屋の中に子どもが登りたくなるような机や台を置かない	3.50	1.30	4.05	0.95	**
13	保育者が担当の子どものお気に入りのおもちゃを把握している	4.31	0.84	4.65	0.95	*
14	部屋の中のおとなの動線が子どもの遊びを妨げないように	3.94	1.06	4.54	0.95	*
15	子どもが入所前から(または登園時)持っていたお気に入りのおもちゃを受け入れ	2.74	1.38	4.15	0.95	***
16	マイ人形マイバッグなど個人用おもちゃの用意	1.86	1.23	4.34	0.95	***

## 5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 4件)

齋藤攻子・宮脇龍介(2014)3歳未満児保育における「もの」「空間」に対する保育者の意識 - 保育者歴・年代との関連に注目して - . 日本家政学会誌 第65巻6号, pp.13-25

上出香波・齋藤攻子(2014)小児病棟における保育士の専門性に関する検討. 保育学研究, 第52巻第1号,

pp.105-115

齋藤攻子(2013)新入園児の慣れ過程にみる泣きの変化と心理的拠点形成. 明星大学研究紀要 教育学部 第3号, pp.55-70

齋藤攻子(2012)3歳未満児の保育環境に関する保育者の意識の実態. 明星大学研究紀要 教育学部 第2号, pp.91-105

【学会発表】(計 7件)

齋藤攻子(2015)保育環境における「もの・空間」を保育者はどう捉えているか - 保育所保育者と乳児院保育者に対する調査結果の比較から - . 日本保育学会第68回大会論文集

齋藤攻子・小川貴代子(2014)乳児院保育者は院内の人的・物的環境についてどう捉えているか. 日本乳幼児教育学会第24回大会発表論文集

齋藤攻子(2014)3歳未満児の保育環境に対する理想と現実を保育者はどうみるか - 質問紙法による意識調査における実施度(実態)と重要度(理想)の回答分布から - . 日本保育学会第67回大会発表論文集, p598

齋藤攻子(2014)日本の保育者の乳児集団保育観と育児・ジェンダー意識との関連. 日本発達心理学会第25回大会発表論文集

齋藤攻子(2013)遊びの環境構成をめぐる乳児院保育者の意識の変容. 日本保育学会第66回大会発表論文集

齋藤攻子(2013)保育者は3歳未満児保育の実態をどう捉えているか - 子どもの遊びと生活を支える人的・物的環境に関する調査の分析から - . 日本発達心理学会第24回大会発表論文集

齋藤攻子(2012)3歳未満児の遊びと生活を支える保育環境の実態 - 保育者を対象とした保育環境の「重要度」調査の分析から - . 日本保育学会第65回大会発表論文集

【図書】(計 2件)

齋藤攻子(2014)「乳幼児のケアと教育に携わる保育者」青木秀弘編著『教職入門 - 専門性の探究・実践力の醸成』明星大学出版部, pp.139-176

齋藤攻子(2012)「乳児期と環境」浅見均編著『子どもの育ちを支える子どもと環境』大学図書出版, pp.28-33

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

齋藤攻子(SAITO MASAKO)

明星大学教育学部 教授

研究者番号: 90279810

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし

(4)研究協力者

小川貴代子(OGAWA KIYOKO) 竹早教員保育士養成所

宮脇龍介(MIYAWAKI RYUUSUKE) 東京歯科大学